



## 盲人の持つ能力の評価に関する研究

著者	徳田 克己
雑誌名	視覚障害心理・教育研究
巻	8
号	1
ページ	7-13
発行年	1991-12-11
その他のタイトル	Estimation of the Capacity of Individuals with Visual Impairments
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124834">http://hdl.handle.net/2241/00124834</a>

# 盲人の持つ能力の評価に関する研究

筑波大学 徳田 克己

## I はじめに

徳田(1988<sup>4)</sup>, 1989<sup>5)</sup>, 1991<sup>7)</sup>)はいくつかの調査によって、視覚障害者に対する一般人の認識の中には視覚障害者の正しい理解のためには適切ではないものが多く存在することを確認し、その改善の必要性を指摘している。特に徳田(1990<sup>6)</sup>)は、我が国では視覚障害者の能力を過大評価し、あたかも超能力を持つ存在として認識する傾向があり、「視覚障害を持つ人は特殊な能力を持っており、自分たちとは異なる存在である」と感じている人が予想以上に多いことを確かめている。この見方は視覚障害者の能力を正しく認識しているものとは言えず、「盲人は話し相手の心の中を読み取ることができる」「点字触読や白杖歩行には持って生まれた能力が必要である」などといった誤解はコミュニケーションや社会的自立の障壁となる可能性がある。早急に正しい認識を形成するための福祉教育的方法論が議論される必要がある。

この点についての基礎的な資料を得るために、一般の人が盲人の持つ能力をどのようにとらえているかを明らかにすることを目的とした実態調査を実施した。本研究は社会文化的な要因の影響を解明するために、日本のほか、韓国や中国において同様な調査を進めているが、本稿では日本に関する現時点での分析結果を中心に報告する。

## II 方 法

### ①調査対象者と手続き

今回の調査の対象となったのは561名(盲学校教師71名、一般の成人318名、中学生172名)の自分自身には心身に障害のない者であった。

盲学校教員は茨城県立盲学校および秋田県立盲学校での教職経験が1年から15年の者であり、筆者が講演の機会を得たときに回答を依頼した。また一般成人は、平成2年に埼玉県川口市青木公民

館で行われた「家庭教育講座」「婦人学級」への参加者、川口市主催「保母研修会」の参加者、茨城県土浦市K幼稚園の「父母講演会」の参加者などであり、筆者が講演した際に回答を依頼した(18歳から65歳の会社員、主婦、大学生であった)。さらに中学生は秋田県本荘市立H中学校3年生であり、その学校の教師に調査を依頼した。

すなわち、盲学校教員は盲人の能力について詳しい者、一般成人はマスメディアや自己体験などからある程度の知識を持っている者、中学生はあまり知識を持っていない者と考えることができる。

対象者に調査の意義、実施方法について説明した後に質問紙調査を行い、その後盲人の能力についての簡単な解説をした。この解説は対象者の持つ誤った認識を改善することを目的に行われたものであり、この種の研究の事後指導として欠くことはできない。なお、本調査は反応の歪みを最小限に抑えるために無記名で行われた。

### ②使用した質問紙

盲人の能力観を調べるための尺度として徳田(1990, 筑波大学視覚障害心理研究室)の考案した13項目から構成されている「盲人能力観尺度」(論文の末尾にこの尺度を資料として添付した)を用いた。この尺度は盲人の能力と対象者自身の能力を対比して回答させるものであり「盲人の持つ能力が訓練や経験の結果である」と認識しているかどうかが明らかになるものである。回答は7件法によって求め、間隔尺度のデータとして処理した。また質問紙の末尾には「盲人の持つ能力」について自由に記述する欄をもうけた。

## III 結果と考察

図1は盲学校教員、一般成人、中学生の盲人能力観を比較したものである。盲学校教員は「盲人は特別な能力を持っているわけではない(第1

項目)」とし、「歩行と点字は特別な能力を要するわけではなく、訓練によって身につくこと（第2～5項目）」、「盲人は心の目で相手の考えていることを知ることはできず、訓練してもそのような能力は身につかないこと（第6、7項目）」、「音楽的能力についても同様であること（第12、13項目）」、「盲人の聴覚や『かん』が鋭いかどうかについてはどちらとも言えず、訓練の効果も明確ではないこと（第8～11項目）」を答えている。これらは盲人の能力の客観的な評価であり、啓蒙活動や福祉教育において一般の人に伝えられるべき正しい認識である。日常的に盲人と接することによって、ステレオタイプ化された「特殊能力を持った盲人像」ではない、より人間的な盲人像をイメージできるようになることが示唆される。

一般成人と中学生には大きな差は認められないが、図1をみると、ともにステレオタイプ化された能力観を持っている傾向があることがわかる。また第8項目の聴覚に関して中学生よりも一般成人の方が「盲人は聴覚が良い」と感じている傾向が強い。これについては、マスメディアなどで取り扱われているステレオタイプ化された盲人像（例えば、映画『座頭市』やニュースなどで取りあげられる能力の高い盲人など）の影響を一般成人がより強く受けているからではないかと思われる。

表1から表4は、それぞれ「白杖歩行」「点字触読」「相手の考えの認知」「聴覚」の4項目について、「自分自身ではどうか、盲人はどうか」という視点から、一般成人の結果をまとめたもの

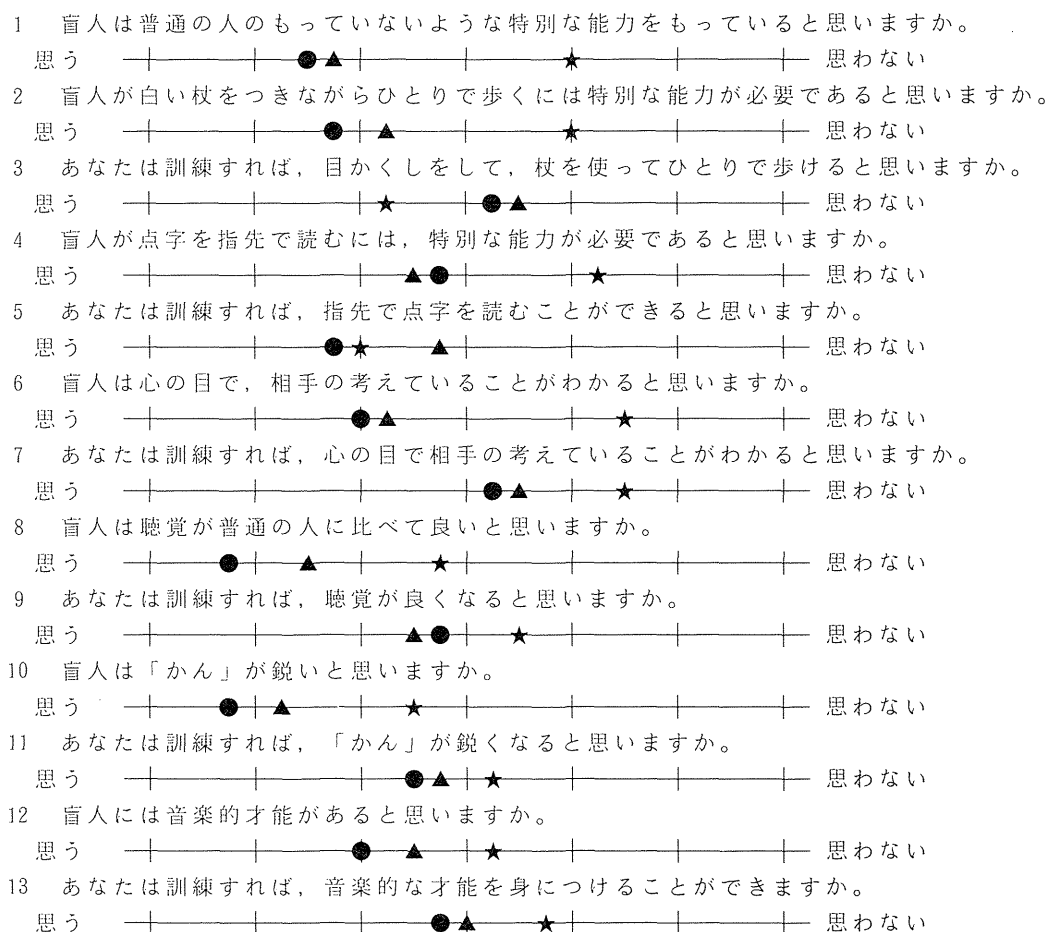


図1. 盲人能力観の職種別比較 (★盲学校教員 ●一般成人 ▲中学生)

である。「思う」に分類した反応は使用した尺度における選択番号の1あるいは2と答えているもの、「どちらとも言えない」は3, 4, 5のいずれかを選択しているもの、「思わない」は6あるいは7と回答している反応である（数字の示す意味は論文末尾の資料を参照のこと）。

表1は白杖歩行についての結果である。この表

表1. 白杖歩行に関する項目分析の結果

		あなたは訓練すれば、目かくしをして、杖を使ってひとりで歩けると思いますか。		
		思う	どちらとも言えない	思わない
盲人が白い杖が必要であると思いませんか。	思う	7 %	1 3 %	1 5 %
	どちらとも言えない	1 0 %	2 3 %	9 %
	思わない	1 0 %	7 %	6 %

表2. 点字触読に関する項目分析の結果

あなたは訓練すれば、指先で点字を読むことができると思いますか。				
	思う	どちらとも言えない	思わない	
盲人が点字を指先で読むには、特別な能力が必要であると思いますか。	思う	9 %	1 3 %	6 %
	どちらとも言えない	1 8 %	2 4 %	6 %
	思わない	1 4 %	7 %	3 %

より、盲人の白杖歩行には特別の能力を必要とせず、しかも自分自身も訓練によって白杖歩行ができるようになると回答した「適正な盲人能力観」を有している者は全体の10%であり、逆に盲人は白杖歩行のための特別な能力を有しており、自分自身は訓練しても白杖歩行はできないとする「歪んだ盲人能力観」を示した者が15%いることがわかる。

表2の点字触読に関しては「適正な盲人能力観」

を示した者が14%、「歪んだ盲人能力観」は6%であり、白杖歩行に比べて適正な反応が多く、盲人の特殊能力観を認める反応が少なかった。これは一般成人にとって、点字触読をすることよりも目隠しをして白杖歩行をすることの方が自己体験しやすいことから、イメージされやすく、それゆえ「目隠しをして歩くことは自分には無理である」と強く感じられたのであろう。

表3. 相手の考えの認知に関する項目分析の結果

あなたは訓練すれば、心の目で相手の考えていることがわかるようになりますか。		
	思う      どちらとも言えない      思わない	
盲人は心の目で、相手の考えていることがわかると思いますか。	思う	8 %      1 5 %      6 %
	どちらとも言えない	2 %      3 0 %      1 2 %
	思わない	1 %      4 %      2 2 %

表4. 聴覚に関する項目分析の結果

あなたは訓練すれば、聴覚が良くなると思いますか。	
	思う      どちらとも言えない      思わない
思う	8 %      1 5 %      6 %
どちらとも言えない	2 %      3 0 %      1 2 %
思わない	1 %      4 %      2 2 %

表3は相手の考えの認知に関する結果である。盲人も自分自身も、心の目で相手の考えを知ることではできないと回答した「適正な盲人能力観」を持った者が22%しかいないこと、また盲人は心の目で相手の考えがわかると回答している者が合計で29%いることは驚きに値する点である。この内容は盲人との直接接触の際の一般人の態度に深く関わることであり、コミュニケーションの壁とな

る危険性がある。映画や小説に登場する盲人にはこういった能力を持つ者が少なくなく、いわゆる「作られた盲人像」の典型である。

表4は聴覚に関する内容である。感覚としての盲人の聴覚の鋭敏さは正眼者と変わらないことが多くの先行研究によって確認されている(佐藤, 1974<sup>2)</sup>)。聴覚向上に関する訓練の効果について明確な研究結果が得られているわけではないが、少なくとも向上するのは感覚としての聴覚ではなく、音の聞き分けや音源の性質、距離の同定といった聴知覚の部分であろうと思われる。したがって、ここでは盲人は聴覚が良いと思わず、また訓練によって聴覚が良くなるとは思わないという反応を示した7%の者が「適正な盲人能力観」を有する者と言えよう。盲人は聴覚が良いとする反応が合計で58%あったが、この種の誤った認識は情報伝達型のコミュニケーションによって容易に改善できることが示されている(徳田, 1990<sup>6)</sup>)。

盲人の能力について自由記述によって求めた意見では、視覚を補償する感覚(聴覚、触覚、嗅覚など)や記憶力が優れているというものが大半であった。しかし中学生には特徴のある記述がみられた。例えば、中学生の16%が「相手の心や性格を読み取れる」としており、また「予知能力がある」「善人と悪人の区別がつく」「動物の心が分かる」などといった意見も3名以上が記述している。さらに「哲学的な考え方ができる」「にせ札が見分けられる」「前世がわかる」「一度に十人の言っていることがわかる」「恐怖を感じない」という記述もあった。

盲人の持っている能力に対する評価は、文化や価値観の影響を受けているものの、個人の体験に依存するところが大きいと考えられる。その体験とは、盲人との直接的な接触体験だけに限らず、家族や友人・知人の話あるいはテレビや小説などを通じた間接的体験を含んだものである。現代は情報化社会であり、さまざまなメディアによって障害や障害者に関する話題が多く提供されている。誤った、あるいは誇張された情報によって、障害者に対してステレオタイプ化されたイメージが形成されることは障害者の社会的自立のためにも避けなくてはならない。

そのためには、小学校、中学校段階での系統的

な障害理解教育が必要となる。誤った、あるいは誇張された情報にふれてステレオタイプ化されたイメージが形成される前に、正確な知識が与えられ、正しい認識が形成されるような手続きがとられなければならない。しかし、その手続きは単なる情報の伝達に終わってはならず、将来にわたって正しい認識を持ち続けることができ、しかも障害児・者に対する実際の援助行動を生起させるものでなければ教育効果があったとは言えない。また福祉教育の重要性は高等教育や社会教育においても同様であり、年配者の態度や能力観の変容に対する抵抗が小学生・中学生に比べて大きいとはいえ、生涯教育の視点から進めていく必要がある。

津曲(1988<sup>9)</sup>)は、大学における映像を用いた福祉教育の実践を継続し、受講生に正しい認識を形成する効果を上げており、徳田(1990<sup>6)</sup>)は保育者養成校の学生を対象として視覚障害者に対する態度を改善する実践を行っている。また柴川・徳田・佐島(1991<sup>3)</sup>)は幼児・児童を持つ母親に対する福祉教育の効果を検証している。さらに盲人の能力観の改善に特に焦点を当てた試みも行われている(佐島・徳田・佐藤, 1991<sup>1)</sup>; 徳田・佐藤, 1991<sup>8)</sup>)。以下に、徳田・佐藤(1991<sup>8)</sup>)が行った点字触読体験を持つことによる一般成人の盲人能力観の改善の実践を紹介する。

この実践は川口市青木公民館平成2年度家庭教育講座に参加した成人婦人17名(39歳~67歳)を対象に行われた。対象者に対して、まず盲人の能力観を調べるために前述した質問紙調査をプリテストとして行い、約1時間30分の点字学習後、同一のポストテストを実施、盲人能力観の変容を評価した。点字の学習では、点字の歴史や構成について講義を受けた後、8つの点字(あ、い、う、か、ふ、め、れ、に)の視覚的な読みと利き手の人差し指を使った触覚的な読みを体験した。これらの文字は、視覚的にはもちろんのこと、触覚的にも全体的パターンが大きく異なるために容易に弁別が可能であった。つまり点字の弁別しやすさを体験する試みであったと言えよう。

表5に、点字学習前後の各項目の得点とそれらの平均の差を調べるための対応のあるt検定の結果を示した。全体的にみると、13項目のうち7項目について学習前後に有意な得点の変化があるこ

とが確認できた。

表 5. 点字触読体験による盲人の能力観の変容

項目番号	体験前	体験後	t 値	危険率
1	2. 2 4	4. 2 9	4. 5 0	1 %
2	2. 8 2	4. 1 2	2. 2 8	5 %
3	5. 1 2	3. 8 8	2. 2 1	5 %
4	2. 8 8	4. 6 5	3. 2 3	1 %
5	2. 3 5	1. 5 3	2. 8 7	5 %
6	3. 8 2	4. 2 4	0. 9 1	—
7	4. 4 4	4. 4 4	0	—
8	1. 6 5	2. 1 8	2. 3 1	5 %
9	3. 2 4	3. 2 9	0. 2 1	—
10	1. 3 3	2. 4 7	2. 6 7	5 %
11	3. 5 9	3. 6 5	0. 1 8	—
12	2. 7 1	3. 2 4	1. 1 9	—
13	3. 9 4	3. 9 4	0	—

第 1 項目の「盲人は特別な能力を持っているか」については、学習前にはかなり強くそのような能力を認めていたが、点字触読を体験した後ではその傾向はなくなっている。また、第 4 項目の「盲人が点字を読む際に特別な能力を必要とするか」において学習後には「特別な能力を必要としない」方向へ能力観が変容していること、および第 5 項目の「あなたも訓練すれば指先で点字を読めるか」において学習後に「自分も読める」と強く感じるようになることなどの結果から、点字触読の体験によって体験者は盲人の持つ能力を正しく認識できたことが確認された。

第 2 項目の「盲人の白杖歩行には特別な能力を必要とするか」において学習後には「特別な能力を必要としない」方向に能力観が変容し、また第 3 項目の「あなたは訓練によって白杖歩行ができるか」において「できない」から「できる」方向に意見が変容した。直接的に盲人歩行を体験していないにもかかわらず、これらの項目に変容がみられたのは、点字触読体験による変容効果の般化があったからである。同様に第 8 項目の「盲人は正眼者に比べて聴覚が良いか」、第 10 項目の「盲人はかなが鋭いか」の 2 項目において、学習後に、変容の幅は大きくはないが、盲人の能力を正しく認識する方向に意見が変化していることも効果の般化がみられている点である。

今後は、さらに効果的な「適正な盲人能力観」を与える福祉教育的方法を考案し、それを実践していきたいと考えている。

## 引用文献

- 1) 佐島 毅・徳田克己・佐藤泰正(1991) 障害のシミュレーション体験による能力観の変容 (1) 一点字触読およびオプタコン触読体験の効果一, 日本特殊教育学会第29回大会発表論文集, 606-607.
- 2) 佐藤泰正(1974) 視覚障害児の心理学 学芸図書
- 3) 柴川明子・徳田克己・佐島 毅(1991) 母親に対する福祉教育は子供に何を伝えるか(1) —盲学校見学法—, 日本保育学会第44回大会発表論文集, 638-639.
- 4) 徳田克己(1988) こんなに知られていない弱視という障害 —幼児教育科女子学生の「弱視」に対する疑問を通して—, 弱視教育, 26 (3), 30-34.
- 5) 徳田克己(1989) 授業において盲人に対する態度を好意的に変容させるためにはどのような講義内容を準備すべきか, 桐花教育研究所紀要, 2, 23-32.
- 6) 徳田克己(1990) 視覚障害児・者に対する一般の人の態度を改善するための技法とその評価, 視覚障害心理・教育研究, 7 (1・2), 5-21.
- 7) 徳田克己(1991) こんなに知られていない弱視という障害(2) —世間の人々の認識と啓蒙活動の実践—, 弱視教育, 印刷中
- 8) 徳田克己・佐藤泰正(1991) 公民館活動において実践したネガティブな障害観を変容させる試み(1) 一点字触読体験による盲人能力観の変容一, 日本教育心理学会第33回大会発表論文集, 895-896
- 9) 津曲裕次(1988) イラストとミニマム・エッセンシャルでつづる障害者の教育と福祉入門, 川島書店

(資料)  
「盲人能力観尺度」

このアンケートは盲人がもっているいろいろな能力を、世の中の人々がどのようにとらえているかを調べるためのものです。この調査の結果は、盲人の教育や福祉に有効に活用されます。また、この調査には名前を書いていただく必要はありません。感じたままに答えてくださるようお願いします。


あなたの性別 ( 男 女 ) 年齢 ( ) 歳 職業 ( )  
学生の場合は学年も記入すること

\*あてはまるところに○をつけてください。

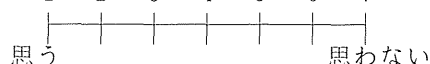
1を「非常に思う」

4を「どちらとも言えない」

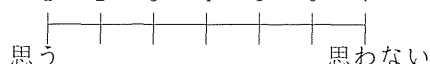
7を「全く思わない」として、感じた程度にしたがって1～7につけてください。

○のつけ方 1 2 3 4 5 6 7  



- 1 盲人は普通の人の持っていないような特別な能力を持っていると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


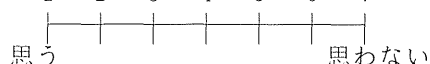
- 2 盲人が白い杖をつきながらひとりで歩くには特別な能力が必要であると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


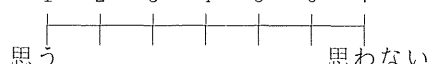
- 3 あなたは訓練すれば、目かくしをして、杖を使ってひとりで歩けると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


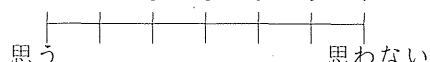
- 4 盲人が点字を指先で読むには、特別な能力が必要であると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


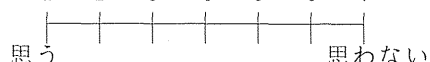
- 5 あなたは訓練すれば、指先で点字を読むことができますと思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


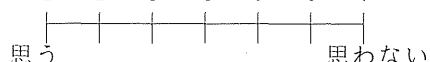
- 6 盲人は心の目で、相手の考えていることがわかると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


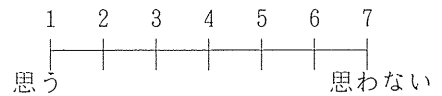
- 7 あなたは訓練すれば、心の目で相手の考えていることがわかるようになると思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


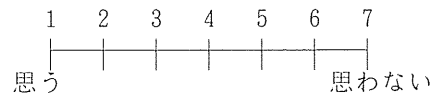
- 8 盲人は聴覚が普通の人にとって良いと思いますか。

1 2 3 4 5 6 7  


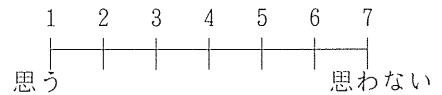
- 9 あなたは訓練すれば、聴覚が良くなると思いますか。



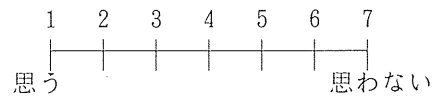
- 10 盲人は「かん」が鋭いと思いますか。



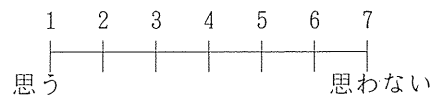
- 11 あなたは訓練すれば、「かん」が鋭くなると  
思いますか。



- 12 盲人には音楽的才能があると思いますか。



- 13 あなたは訓練すれば、音楽的な才能を身につ  
けることができますか。



---

\* 盲人がもっていると思う特別な能力を、思いつくままにあげてみてください。例のよう  
に、どのようなことでも、またあやふやなことでも結構です。

(例) 盲人は1回会った人の声は必ず覚えている。

ご協力ありがとうございました。